はじめに

篇は「読む」というよりは、「歌う」ものかもしれません。教会は、ヘブライ語での詩篇朗誦を継承して、ドイツ語や英語での「詩篇歌」を作りました。また、以前は、どの教会の礼拝でも必ず「詩篇交読」がありました。伝統的な教会では今も守られていますが、これはぜひ保ちたいものだと思います。

また、詩篇は、口に出して唱えたあとは、それを心の中で静かに「味わう」ものでもあると思います。ペンギンクラブでは、今までの詩篇の黙想を「流れのほとりに――詩篇の黙想」（1～3集）としてブックレットにまとめてきましたが、ここに最後の第4集を発行できましたことをうれしく思います。これを機に、詩篇150篇のすべての黙想を繰り返すことをお勧めします。

今月の執筆者は、次の通りです。各ページの末尾に執筆者のイニシャルが記されています。。

大川道雄（OM）北米ホーリネス教団名誉牧師
大久保満（MO）アンカーサウスベイ教会牧師
高岡宏光（HT）オーランド日本語バプテスト教会牧師
小西健二（KK）サンアントニオ教会牧師
鶴田健次（KT）ラスベガス日本人教会牧師
横井滋幸（SY）コロラド日本語教会牧師
依藤慎太郎（YS）ハリファックス・ジャパニーズ・バイブル・フェローシップ代表
依藤安希（AY）同夫人
中尾フィリップ（PN）ダラス永楽長老教会日本語ミニストリー協力牧師
中尾照代（AY）同夫人

聖句引用は新改訳２０１７からです。引用句の後の括弧内の数字はその箇所の節を表します。なお、ページ番号は第1集からの通し番号となっていますので、ご了承ください。

使い方

これは聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む（Read）心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する（Reflect）黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのようなことが書かれているのか、それが自分にとってどんな意味があるのかを聖書に問い、聖書に答えてもらうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る（Respond）この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれません。あるいは、まだ解けなかった疑問や解決していないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する（Remain）祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。

知恵のある者はだれか。／これらのことに心を留めよ。／主の数々の恵みを見極めよ。（43）

この詩篇のキーワードは、四つの部分に繰り返して登場する「この苦しみのときに　彼らが主に向かって叫ぶと／主は彼らを苦悩から救い出された」です。「苦悩からの救い」、これがこの詩篇の主題です。四つの苦しみに対応して、真の満たしとは、自由とは、いやしとは、知恵とは何かという問いにそれぞれ答えています。

ここにある四つの苦しみのそれぞれは、私たちが経験する苦悩の現実を要約しているかのようです。この苦しみに対する神からの規則的な応答は、主が私たちの祈りを聞いておられ、混乱や苦悩から導き救い出してくださったと感じたときに、私たち自身が主に感謝の賛美を捧げる必要があるということです。私たちは、苦悩や誘惑の中にいるときに主に叫び、それが静まると、主が私たちのために多くの働きをしてくださったことを忘れてしまうような弱い者です。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。…」（第一テサロニケ5・16～18）これが、神の御心です。

詩篇の最後の33節から終わりまでは、主が悪人には悩みを、飢えた者、貧しい者、正しい者には祝福をもたらされることを証ししています。これらの悩みと祝福は、物事を正反対に変えられるという形であり、何もかも持っていると感じている人は何も持たず、何も持っていないと感じている人は、主から多くのものを与えられるのです。いつも主の恵みを覚え、歩みたいものです。

祈り　主よ、あなたが恵みの基であることをいつも覚えて歩む者にしてください。

SY

主よ　私は諸国の民の間で　あなたに感謝し／もろもろの国民の間で　あなたをほめ歌います。（3）

この詩篇は、57篇と60篇のそれぞれのある部分から抜粋されて結び合わされたものです。テーマは、主に対する大きな信頼と、敵に打ち勝つ主の力です。

前半（1～5節）の部分でダビデは神への賛美への並々ならぬ意欲を告白しています。それは「私は暁（あかつき）を呼び覚ましそう」（2）という表現の中に表れています。暁は黙っていてもやがて訪れます。それは夜を徹して神を賛美するという決意です。事実、ダビデは、24時間賛美するビジョンをもち、それを実現した人です。

ダビデは神に愛されているのに、「神よ　あなたは私たちを拒まれるのですか。／神よ　あなたはもはや／私たちとともに出陣なさらないのですか」と祈っています。戦いにおいて不利な状況にあったようです。そうした中で、「あなたの愛する者たちが助け出されるよう／あなたの右の手で救い　私に答えてください」（6節）と祈っています。この祈りに対する答えは、7～9節にあります。そこでは神が「喜び勇んで」勝利を与えることが約束されています。信仰生活の中で体験するゆらぎに勝利し、力ある働きをしていくために必要なことは、自分が神に愛されているという確信です。人間に救いを求めても無駄であることと、私たちの霊的生活の敵に終止符を打つには主に頼るしかないこととの比較を強調しているのです。

祈り　主よ、あなただけを見上げて、信頼と確信を持って歩ませてください。

SY

〜……途中省略……〜

Penguin Club
https://penguinclub.net

息のあるものはみな／**主**をほめたたえよ。／ハレルヤ。（6）

この詩篇では、「角笛」、「琴」、「竪琴」、「タンバリン」、「笛」、「シンバル」など、管弦楽で使われるあらゆる楽器を総動員して、「神をたたえよ」と言われています（3～5節）。

しかし、人の声に勝る「楽器」はありません。声は、「息」を使って音を出します。私たちは自分の息で神を賛美しますが、賛美の原動力は、じつは、聖霊の息吹、聖霊の風です。パイプオルガンが笛に風を送って音を出すように、あらゆるものは聖霊の風が送られて、賛美を奏でるのです。

私たちの人生には、環境に不満を持ったり、社会に苛立ちを覚えたり、まわりの人々が好きになれなかったりすることが多いものです。しかし、聖霊の風がそこに吹くとき、好ましいとは思えない環境の中でも、賛美が生まれます。激しい風が木を揺らし、電線を震わせて恐ろしい音を出すようなときでも、聖霊の風は、私たちの心に穏やかな賛美の歌を生み出してくれます。パウロとシラスは獄中でも賛美を歌い、それは他の囚人にも大きな感銘を与え、看守とその一家の救いへとつながりました。

信仰人生は、聖霊が生み出す音楽です。信仰者の内に共に住んでくださる聖霊は、荒れた世界の中でも、私たちを通して賛美を奏でてくださいます。賛美は聖霊の風に乗って人々に届けられ、主の御名が、多くの人々によって、崇められるのです。

祈り　主よ、私に息のある間、あなたをほめたたえてやまない者としてください。聖霊の息吹によってあなたを賛美する者としてください。　OM

試し読みはここまでです。

お気に入りましたら、

ご注文ください。

Penguin Club
https://penguinclub.net